

フランス語の語順の通時的変遷に関する覚書

Mémoire sur le changement diachronique de valeur positionnelle dans la langue française

浅野 幸生
Yukio ASANO

0.

これ迄ラテン語から近代フランス語に到る統辞面の変化は、自由な語順が固定化する過程とか、総合的語法から分析的語法への移行とか表現されてきた。このような変化が起こったことを事実と認めた上で、それを少し異なった角度から眺め解釈してみたいというのが本論の目的であるが、ここでは特に、非人称構文を含む自動詞構文類を直接の対象にする。⁽¹⁾

1. 非人称構文の沿革

現代フランス語には、「非人称ヴァリエント」⁽²⁾と呼ばれる他のロマンス諸語にすら見られない特殊な非人称表現が存在する。(ex. Il est arrivé deux hommes. VS. Deux hommes sont arrivés.) この表現は、「主語」であるところの *il* が具体的指向対象を持たないという理由から他の非人称表現と一括して分類されることが多いが、筆者は発生的および構造的な理由からこれを特殊なものとして扱うのが正当であると考えている。

ラテン語の時代には非人称ヴァリエントは存在しなかったが、現在見られる他の非人称表現の多くに相当するものは見られた。一天然現象 (*pluit, ninguit.....*), 感情・感覚 (*miseret, pudet.....*), 状況 (*licet, decet.....*) など。これらの非人称は印欧語の非常に古い層にまで遡ることができ、文献によって確認しうる最も古い段階においては、主語として神が表出されていた。Skr. *devo verṣati* 《神が雨を降らせる》, Gr. Hom. *ἔσθ' ἄρα Ζεὺς* 《ゼウスが雨を降らせた》後にこれが表出されなくなり、主語無しで用いられたり、フランス語におけるように言語によっては代名詞がそれにとって代わるようになったのである。

非人称表現において *il* が確認される最初の文献は12世紀のものである。G. Hilty は12世紀のテキストの中から *il pleut*. 型の文例を11見つけている⁽⁴⁾ が、そのうちの7例が *il* 無しで、4例が *il* 付で用いられている。彼はこの時代に *il* が任意についたりつかなくなったりするのではなく、ある条件の元で省略されることを示している。⁽⁵⁾ 実際古仏語の段階では、*il* は省略されることの方が多かったようだが、これが次第に定着し義務化してゆくのである。だが *il* の無い非人称は、16世紀でも Montaigne や Rabelais に見られ、17世紀になっても日常語で用いられたと言う。⁽⁶⁾

2. 語順と機能

il の添加が他の人称動詞表現からの類推であると言われているが、これが語順の固定化と平行して進んだことは何を意味するのだろうか。その前に語順の自由度とは何だろうか。

主語・動詞・補語から構成される発話の形は、理論的には以下の6通り考えられる。

(1) *Sujet-Verbe-Complément*

- (2) Sujet-complément-Verbe
- (3) Complément-Sujet-Verbe
- (4) Complément-Verbe-Sujet
- (5) Verbe-Sujet-Complément
- (6) Verbe-Complément-Sujet

現代語より遙かに語順が自由だと言われる古仏語では、この6つの形は全て現れる。ただ L. Foulet も証言するように、その中でも(1)と(4)の頻度が圧倒的に高い。⁽⁷⁾

(1)と(4)に使用が集中しているのは、この時代既に動詞を文中の二番目に置く傾向が確立されつつあったことを示している。⁽⁸⁾ 多少単純にこれら二形式をこの時代の「標準的な」語順とした場合、他の形式が話し手—もしくは書き手—の気まぐれによって使用されたのか、それとも何か明確な動機をもって使用されたのかが問題となる。

A. Meillet は、古い時代の語順は統辞的 *syntaxique* 価値ではなく表現的 *expressive* 価値を持ち、従ってこれは文法より修辞学の領域に属すると言う。⁽⁹⁾ 確かにこれ迄しばしば、主語以外のある要素が文頭に置かれた場合それはその要素に対して注意を引くためであると言われることがあった。だが事実はそれ程単純ではなく、例えば最近のある研究の中でフランス語の絶対倒置文 (ex. *Eclata la guerre.*) においては先行の動詞よりもむしろ後続の主語に注意が集まることが指摘されている。⁽¹⁰⁾ 確かに正常な語順を変えることによって文体的・感情的効果を生み出すようなことはどの言語でも行なわれるであろうが、その効果の度合は語順の変え方だけでなく言語によってもまちまちなのである。「例えば、スペイン語やイタリア語では強調上たいした違いもないのに語順が気ままに変わる、といった印象を人は抱く。」⁽¹¹⁾ 同じフランス語でも現代と中世では語順の変化の持つ意味が異り、古仏語では語順の許容度の高さゆえに、どの文型を用いてもさほど大きな違いはないのではないだろうか。

古仏語やラテン語における語順の自由さとは、ある文型が他の文型に代わってもそれによって引き起こされる発話の意味的機能的変化の度合が低いという意味であり、表現を換えて言えば、それぞれの文型の「対立度」が現代語に比べて希薄だということであろう。

3. 非人称ヴァリアントの起源

古仏語において非人称表現は現在よりも頻繁に用いられたし、⁽¹²⁾ 非人称ヴァリアントに相当するものも存在した。ラテン語の段階では全く存在しなかったのだから、その発生の契機が問題となる。ただ古仏語におけるこの形式が現在のそれと異なるところは、後続名詞句が複数の時しばしば前の動詞も複数形になったことである。

En cel pré avoit un rastelier ou *il menjoient cent et cinquante toriaus.* (La Queste del Saint Graal)
 現在では名詞句の単複にかかわらず必ず単数形におかれる。この事実から古仏語においては後続名詞句が文の主語で、前の動詞がそれに一致しているように思われ易い。だが古仏語の代名詞 *il* は、現代語の *il* だけでなく複数形の *ils* をも兼ねていた。だからこの場合「*il*」の方に一致しているとも考えるのである。

動詞が前の *il* よりむしろ後続の名詞句に一致していると主張することが正当性を持つとすれば、それは前の *il* がしばしば省略されるという事実のためであろう。*il* が省略され動詞が後の名詞句と一致している文は、外見上「倒置文」と全く同じである。古仏語では補語の左方転位を伴わない倒置文が珍しくなかったため、この種の形式はむしろ倒置文とみなされるだろう。

今わかり易くするため、古仏語において共存した三形式を現代フランス語で表わしてみよう。

(a) Arrivent deux amis.

(b) Il (s) arrivent deux amis.

(c) Il arrive deux amis.

(b), (c)はお互いに自由変異であり, (b)は il が省略されれば一事実しばしばそうなのだが一倒置文(a)と表層構造上全く同一になるとすれば, より古い時代から存在した(a)のような倒置文が非人称ヴァリエントの原形であるように思える。

周知の如く, (b)はその後消滅し, (a)は現代フランス語において限られた使用範囲しか持たないながらもなんとか生き残り, (c)は《productif》¹⁴³な形式として現在まで存続している。この時代においては(a)が安定した normal な語順の一つであるのに対し, 頻度こそ高いが(b), (c)の間には動揺が見られる。この時代には(c)よりむしろ(b)の方が普通だったようだが,¹⁴⁴ その後(b)が, 形式上紛わしい(a)との混合を避けるために消滅した—あるいは(c)に吸収された—と仮定すれば, その時期に既に倒置文と非人称ヴァリエントの間の「機能の分化」が始まっていたと考えられるかもしれない。頻度の高い(b)が低い方(c)に吸収されただけに一層そう思えるのである。

いずれにせよ通時的観点から見ると, 非人称ヴァリエントの前身は目的補語の欠除した倒置文で, これが何らかの理由—おそらくリズム, 動詞を二番目に配置する傾向の定着, 人称形からの類推など—によってその前に il という代名詞をとり, それが他の形式と異なる機能を持つに従って独立した形式となっていくのだろう。もしそうだとするとやはり, 後続名詞の数に動詞を一致させる形の方がより古いことになる。

ところで非人称に il のついた理由はしばしば説明されることがあっても, 前につく要素がなぜ il でなければならなかったのかについて論じられたことは殆んど無いように思える。古仏語の段階で数ある非人称表現に遍く il が用いられるようになってくるわけだが, それぞれの場合の動機と時期が必ずしも一様でない可能性があることを指摘しておかねばならない。

例えば天候表現において, 動詞が本来三人称単数になっている以上主語たる代名詞は三人称単数でなければならない。その当時の人が pleut とか neige などと表現される現象に超自然的な力をどのくらい感じていたかについては知る由もないが, 男性単数になったのはそれらの「行為」が女性よりも男性のイメージに合うといったような意味的理由からか, あるいはラテン語の非人称動詞が中性単数に置かれることがあった¹⁴⁵ ので, 中性代名詞を語源とする il が選ばれたのかもしれない。¹⁴⁶

それに対しこの段階での非人称ヴァリエントの前身だった形は, 動詞が単数だったり複数だったり安定しなかったので, il のような単複同形の代名詞の存在は好都合だったろう。ただ先にも少し触れたが, 非人称ヴァリエントの il は元来複数だったのかもしれないのである。そうすると最初から他の非人称の il とは異っていたことになり, 動機の相違うんぬんを言う前に無関係であった可能性すらある。この観点からすると, 非人称ヴァリエントとそれ以外の非人称が「同じ il」をとるものとして同類となるのは, 男性代名詞に単数 il—複数 ils の形式的対立が生じ, 非人称ヴァリエントの動詞が単数形に統一されるのを待たなければならないことになる。

従って同じ非人称と呼ばれていても, 発生的に見れば元の形はもちろん, 代名詞をとる動機も代名詞そのものも異質であると考えられる。現代語においても, 天候など他の非人称表現には il 以外に ça, ce などの他の代名詞やゼロ形態なども可能なのに対し, 非人称ヴァリエントでは必ず il でなければならないという事実がある。この時代に動詞を文頭に置く諸文型が, 先に述べたような理由によりその前にある要素を補わなくてはならなくなり, その際 il が一種の passe-partout として活躍することになったのかもしれない。

では、非人称形を始めとするこれらの文型の各々が他と区別されるための特徴を有しているのである。

5. 結び

既に観察したように、古仏語には現代フランス語に見られるこのような文型間の明白な対立は存在しなかった。いずれの段階にも主語、動詞、補語などは存在し、それらによって構成される文型も存在するのだが、語順の持つ意味の違いが両者を同一平面上で比較することを無効にしてしまう。古仏語では主格と被制格の間に形態上の区別が存在し、これが語順の機能負担量を軽減し、その結果あらゆる文型が許容された。それが格語尾が消滅すると共に、その区別を語順が負担しなければならなくなり、次第に語順が固定されるようになった。そしてそうなるようになって始めて、語順を変えることの効果が大きくなったのである。ここであげた配列という次元の範列が成立するようになったのはこのような背景においてであり、また範列の存在自体がそれを構成する各文型の機能の独自性を保障するのである。

(注)

- (1) 本稿中の基本的な考えは、筆者が1988年3月に提出した東京外国語大学修士論文「非人称ヴァリエントの機能について」に現われている。
- (2) 「談話の非人称」とも呼ばれる。
- (3) 「……最古の例では主格としてかかる自然現象を支配する者と信ぜられていた神が表出されている。これはまた印欧語族に名詞に性があり、動詞には人称別がありながら、自ら行動をなし得ないものと考えられる物に対する特別な形がなく、物を表わす中性名詞に主は格がなく、従って動作を行なう者は常に人あるいは擬人化されたものでなくてはならなかった事実によく一致する。」(高津, (p. 320~) 本文中の用例も本書から借用した。
- (4) p. 244~245.
- (5) 彼自身の言葉を借りれば、「もし文が補語で始まっていれば、名詞主語はいつも動詞の後におかれ、代名詞主語は殆んどの場合省略される。」(p. 246) これは Foulet が《le grand fait qui domine la construction médiévale》と呼んだ古仏語の倒置規則である。(p. 307)。
- (6) Grevisse, p. 601 現在でも話し言葉で省略されることがある。ex. Faut pas y penser !.
- (7) p. 37~44.
- (8) Harris (ch. 1 & 2) によれば、この傾向はラテン語の時代に既に見られたと言う。
- (9) p. 365.
- (10) 東郷・大木 (1986).
- (11) ボズナー, p. 185.
- (12) Ménard, p. 122.
- (13) Rivière, p. 289.
- (14) Foulet, p. 203.
- (15) 自動詞の受動相は完了分詞を中性単数形にする。ex. *Acriter pugnatum est*.
- (16) ラテン語における中性の指示詞 *illud* が男性の *illum* と同じ *il* に変化した。
- (17) p. 140.
- (18) 再帰形の *se passer* も同様。
- (19) 非人称ヴァリエントの機能については浅野 (1989) を参照。
- (20) 人称形は「無標」の文型と考えることもできる。

参考文献

- 朝倉季雄 (1975): 「現代フランス語における il+V+N 型非人称構文」『中央大学90周年記念論文集』p. 117～41.
- 東郷雄二・大木充 (1986): 「フランス語の主語倒置と焦点化の制約・焦点化のハイエラキー」『フランス語学研究第20号』p. 1～15.
- (1987): 「非人称構文の談話機能について——倒置構文との比較をめぐって」『フランス語学研究第21号』p. 1～19.
- 高津春繁 (1954): 「印欧語比較文法」岩波全書。
- 浅野幸生 (1989): 「非人称構文と文脈」東京外国語大学フランス科論集『フランボー』第16号, p. 55～65.
- R. ポズナー (1982): 「ロマンス語入門」(風間喜代三, 長神悟訳: 大修館)
- Bally, Ch. (1950): *Linguistique générale et linguistique française*, 2^e édition, Berne, Francke.
- Blinkenberg, A. (1928): *L'ordre des mots en français moderne*. Copenhague, Munksgaard.
- Bonnard, H. (1950): *Grammaire française des lycées et collèges*.
- Foulet, L. (1930): *Petite syntaxe de l'ancien français*, Paris, Champion.
- Gougenheim, G. (1938): *Système grammatical de la langue française*, Paris, D'Artrey.
- Grevisse, M. (1975): *Le Bon Usage*. Gembloux, Duculot.
- Harris, M. (1978): *The Evolution of French Syntax, A comparative approach*. London, Longman.
- Hériaux, M. (1980): *Le verbe impersonnel en français moderne*, 2 vol. Paris, Champion.
- Hilty, G. (1959): “*Il* impersonnel, syntaxe historique et interprétation littéraire”, *Le français moderne* 27, p. 241-51.
- Meillet, A. (1937): *Introduction à l'étude comparative des langues indoeuropéennes*, Paris.
- Rivière, N. (1979): “Problème de l'intégration de l'impersonnel dans une théorie linguistique”, *Le français moderne* 47-4, p. 289-311.